

学校主導型ピア・サポート・プログラムの支援：小学校全校の授業案開発と実践

Consultation for School-based Peer Support Program: Development and Implementation of School-wide Lesson plans in an Elementary School

○牧野 昌美 (*1)・中野 良顯 (*2)

Masami MAKINO and Yoshiaki NAKANO

なかよしキッズステーション(NPO 法人教育臨床研究機構)

(Nakayoshi Kids Station)

1. 問題と目的

われわれは1999年度から公立小・中学校数校と協力して、ピア・サポート・プログラムの開発と普及に取り組んできた(中野, 2006)。われわれの学校支援方式は、外部支援機関主導型と学校主導型に2分される。前者はわれわれ外部支援機関が授業案を開発し提供する方式、後者は小・中学校が主体となって授業案を開発しわれわれはコンサルタント役に徹する方式である。学校主導型で全学年が研究的に取り組んだ実践例は少ない。本研究の目的は、学校主導型ピア・サポート・プログラムの全校規模の実践を希望する小学校に対して、われわれが行うコンサルテーションの適切な方法と留意点を明らかにすることである。さらに全校的介入によってもたらされたアウトカムについても分析して報告する。

2. 方法

参加者: 東京都C小学校教師全24名、1～6学年児童全515名。

コンサルタント: 上智大学ピア・サポート・プロジェクト(現なかよしキッズステーション) 代表1名(*2)、シニア・スタッフ3名(*1含む)。

コンサルテーションの手順: ①事前協議会、②2学年ずつの教員研修会、③各学年ごとの研修、④教師主導による授業案開発(コンサルタントが提示したモデル授業案を含む参考文献を参照して教師が草稿を作成、コンサルタントが添削訂正、訂正版の教師による検討、最終版の完成)。⑤児童事前査定、⑥教師主導型チーム・ティーチングによる授業実践(各学年が時期をずらして実践するため、他学年は平行して④を実施)、⑦校内研修(授業の講評)、⑧児童事後査定、⑨事後協議会。

開発する授業案の成分: 指導者・補助者用の授業台本、プリントや掲示物など授業で用いる教材、授業後に提示する学習を般化させるための宿題や掲示物。

各学年の授業テーマ: 各学年の教師が選んだ授業テーマは表1の通りだった。

効果の査定: 授業ごとの振り返り用紙と、事前事後質問

表1 各学年の授業テーマ

学年	授業回数	テーマ
1	4	あいさつ、聞き方
2	4	あいさつ、話し方、聞き方
3	4	自己理解、話し方、聞き方
4	5	自己理解、話し方、聞き方、感情
5	5	自治
6	4	自己理解

紙調査(3年生以上は学習するスキルの実行程度、さらに4年生以上は学級風土)によって効果を分析した。

3. 結果

教師の変化: 年度当初の予定通り、すべての学年において必要な授業案26本を開発することに成功した。モデル授業案をほぼそのまま用いた例もあったが、中には全く新しい授業台本を開発するスキルを習得した教師も数名出てきた。当日の授業実践も、徐々にコンサルタントの手を借りずに実施できるようになった。一方、コンサルタントの支援から全く自立できない教師もいた。学校全体としてのピア・サポート・プログラムに対する評価は肯定的であり、次年度の継続が決定された。

児童の変化: ほぼ全学級の80%以上の児童が「授業に楽しく参加できた」「学習したことを日常へも活かしたい」と振り返り用紙に回答した(6年生を除く)。

質問紙調査の結果、3年以上の学年では、自由記述の分析から、学習内容を知識として身につけたことが明らかになった。さらに3年生の自己理解、聞き方、4年生の話し方、聞き方、感情、についてのスキルの実行程度に関しては有意なプラスの変化が見出された。しかし、4年生以上の学級風土、5年生の自治、6年生の自己理解に関しては、有意な変化は見られなかった。

4. 考察

学校主導型の全校規模のピア・サポート・プログラムの支援においては、次のような手立てを講じることが望ましい。①各学年の大多数の教師にプログラムの意義を理解させる。②プログラム自体をユーザー・フレンドリーな導入しやすいものにする。③モデル授業案によって子どもたちが望ましい行動変化を示す場面を実際に体験させる。④関連する先行研究や科学的根拠を示す。⑤アウトカムをデータで示す。

また学年ごとの留意点として、次のことが明らかになった。1年生は、楽しく学習させること、宿題が効果的。2年生は、恥ずかしさが出てくるので、楽しさだけでなく知的好奇心を満たす仕掛けをすること。宿題は重要。3年生は、授業や友人に対する否定的反応が顕著になるので、学級や個人の特性に応じた授業と支援を行う。4年生は、新しいことを学習して役立てたいという意欲が強まるので、それを利用してまとまった知識を教えること。5,6年生は、授業を受けて得をした、よいことを知ったという実感を持たせること。そして獲得したスキルを般化させる場面を意図的に設定するようにすること。

文献

中野良顯.(2005). ピア・サポート. 図書文化社